

第24号



川越初雁会



令和五年度

川越初雁会総会開催

令和五年九月十六日(土) 第十三回川越初雁会総会が、川越高校図書館セミナー室で開催されました。

新年度に当たって

総会次第

令和五年度はコロナの影響もだいぶ薄らいで、さまざまな行事がコロナ前の時と同じように行えるようになってきました。

総会、役員会、散策会、ゴルフなど、多くの人と歓談できる機会が戻ってきました。賑やかに楽しく川越初雁会を運営していきたいと思えます。



総会で挨拶をする金子会長

金子会長の挨拶の後、一瀬副会長の進行で、令和四年度の事業報告、令和四年度の決算の承認が行われました。

決算はコロナの影響で、事業があまり行えませんでしたので、例年よりやや低めの、三十一万二千三十六円の決算となりました。また、会員数は二百九十二名の登録者になっています。

次に令和五年度の事業計画案と予算案が採決、承認されました。

総会の後引き続き、松尾鉄城氏(川高十八回)現女子栄養大学教授の記念講演が行われました。以下に要約して掲載いたします。

令和五年度定期総会 記念講演

川越・入間地区の文人・画人展

「石川勝利コレクションより」の開催計画について

講師

松尾鉄城氏(高十八回)



松尾 鉄城講師

た作者の絵画や書を収集しておりました。

その数、約千点、この膨大な「石川コレクション」をどうするか？奥様の尚子さんから相談を受けました。基本的にはしっかりと保存・公開していただける所に寄贈したいとの意向ですが、まずは多くの方々にこのコレクションの存在を知って頂く必要があると考えて、県内各地で展示会をしようということになりました。

まずは石川先生の地元、東松山で六月に、小川町で九月に展示会を開きました。そして来る十一月二十三日から三十日まで、川越周辺に関係する作品の展示会を蓮馨寺の講堂で行うことと



石川 勝利先生

に数学の教員として奉職されます。

以後平成十四年に定年退職するまで、七つの県立高校で教鞭を執りました。平成八年に熊谷高校の教頭時代、息子さんが北海道大雪山にて遭難死するという大きな出来事に遭遇します。

ご子息の遺体は四月の雪解け後に発見されました。四十九日の法要の際、墓碑の揮毫を師と仰ぐ金子兜太先生にお願いし、その字は「大悲」。この意味は広く衆生の苦しみを救う仏の大きな慈悲を表し、また観世音菩薩を表す言葉だそうです。熊高教頭時代に一度、集

まず石川先生とはどういう人物であったのか、彼の生き方とは、をもう少し詳しくお伝えします。石川先生は昭和十七年東松山市唐子に生まれまして、唐子小、唐子中、川越高校卒業後、東京教育大を経て、坂戸にある東京教育大付属坂戸高校

要約すると、「こちらの展示物は、私達の住む埼玉県内にて、幕末から明治大正昭和期のもので、作者も医者、僧侶、農民、実業家、

市井の教師など職業もさまざまです。その時代は今よりも情報量が圧倒的に少なく、交通も不便であった時代にもかかわらず、今よりもはるかに『郷土文化』が栄えていました。

これらの作品はけっして最高のものではありませんが、郷土で生き、郷土で活躍した先人たちを見直し、残された文化を大切にすることの一助となれば幸いです。私のような活動をしている者としては、常にこれを意識していたと思った次第です。」

石川先生は退職後は、引き続き作品の収集活動を続けながら、地域の獅子舞の



今回展示された勝田蕉琴の龍図

保存や、伝承組織の運営、畑仕事に勤しんでいたとのこと。戦後間もないときに制定された教育基本法が、平成十八年に全面的に改定されました。それがまったく、ニュースとして取り上げられなかったのは残念でありました。

その中で「伝統と文化を

尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」とともに、「・・・」と郷土の二文字が入りました。また同年公布された学校教育法も同様に「郷土を愛する」という文言が登場しました。柔道や剣道が必修となり、

雅楽も音楽の授業に取り入れられました。日本固有の文化になじむことを目的としています。

フランスの歴史学者であるフエーベルは次のように述べています。「歴史学者は任務遂行には確かに文献を活用します。がそれだけではない。詩、絵画、戯曲も我々

にとつては記憶であり、生きた歴史の潜在的な思想と行動で満ち満ちた証拠です」

英国の哲学者であるバーランド・ラッセルは「歴史学は、専門的な歴史家でない人たちに訴えることによってのみ、この機能を果たすことができる」と語っています。

江野 樗雪について

江野樗雪は東松山出身の画家で天保年間より川越に住み、寺社の奉納絵などを描きました。彼の作品は川越や、八王子から群馬県にかけて、寺院や旧家に多数残されています。

有名な作品としては「川越氷川祭礼絵巻」や「石原のささら獅子舞図」があります。こちらの絵は川越祭礼絵巻の一部ですが、これは彼が十五才のときの作品と言われています。本当かな？と思いますが、今の子どもたちをみても漫画や絵が上手い子はたくさんいる

ので、あなたが間違いないでなさそうです。

そろそろ川越まつりの季節がやってきますが、現在の巡行祭は江戸時代と全く同じというわけではありません。当時はこのように行われていたのだというのがよくわかります。殿様をはじめ武士たちと町衆総出で仮装して街を練歩いて盛り上げていた様子がよく描かれています。

形を変えてはいますが、今と昔は基本的には同じということがわかります。子どもたちや女性も参加していて、名前まで記載してあります。樅雪はいちいち調べたのでしょうか？疑問はつきません。

ここで、絵の中に全身黒の人たちが描かれています。江戸時代の人たちは黒人の存在を知っていたと思われれます。またここには唐船の引物や、大陸風の服装で仮装している人が描かれ

ています。

これを見ると、当時民間レベルでの国際的な文化の交流があったと思われる。「黒ンぼ二人」の表記があります。これは差別用語ではなく、新しいものを取り入れようという作者のあらわれと見るべきと思います。この絵が現代人に訴えるも



講演中の会場

のとは、何なのでしょう？

先程紹介した英国人の碩学の言葉のとおり、一般教養人の心に刺さらなければ歴史家として意味がない。樅雪が訴えたかったものは、多文化共生社会の構築であつたのではないのでしょうか。国籍や民族の異なる人々が、互いの文化的違いを認

め合い、尊重し合い、助け合いながら、共に生きていく社会の構築を願っていたのではと感じています。

西川 鍊造について

十一月の蓮馨寺で行われる展示会期間中には、日替わりで講演が行われます。三日目の十一月二十五日には二十回卒西川利雄さんの講演があります。仙波東照宮の氏子総代であり、川越初雁会の会員でもあります。彼に自分の先祖である「西川鍊造」について話をして頂く予定となっております。彼は郷土部出身ですが、今一生懸命に準備をしています。今日は西川鍊造を簡単に紹介しておきます。

西川鍊造は川越出身の勤王の志士で、昌平学の佐藤一斉より儒学を学び、水戸の藤田東湖にも師事し、尊皇攘夷思想に傾斜、維新ということを最初に使った人として知られる清川八郎が結成した「虎尾の会」に

参加します。過激な攘夷活動に対して、幕府より鍊造を含む会の同志八名に捕縛命令が出まして、狭山奥富の広福寺付近に潜伏していたところを捕縛されてしまっています。その後獄中死いたしました。鍊造は今、喜多院に葬られています。

榎本武揚と川越について

最後に、榎本武揚と川越との関係についてお話しします。榎本武揚は、幕末の幕臣で、安政三年に長崎海軍伝習所に入り、勝海舟の教えを受けます。二十六才時にオランダへ留学、幕府の海軍副総裁となります。

慶応四年、江戸城無血開城の直前に八隻の軍艦とともに江戸を脱出、箱館へ向かい五稜郭を新たな徳川家の本拠として新政府軍に対抗しますが、函館戦争に敗れ、降伏しました。

新政府軍の将、薩摩の黒田清隆は、榎本を自刃させてはならないと考えていま

した。彼の持っている蝦夷及びロシアの情報を新政府に活かすべくと。木戸孝允ら長州勢は厳罰に処しとの意見でありましたが、黒田や福沢諭吉は榎本の才能を評価して、助命を主張した結果投獄されることとなりました。本人も丸坊主になりました。釈放後はすぐに明治政府に任官というわけにもいかず、姻戚関係にある川越笠幡の発智家に二ヶ月の間謹慎したそうです。

勝海舟が明治六年に川越の氷川神社を訪ねたとの記録がありますが、何をしに来たのだろうかと言われています。小川に紙を買いました。来たついでなのとも言われました。おそらく笠幡の発智家に謹慎中の榎本を訪ねてきたのだろう、そして新政府の海軍を率いてくれと要請したのだと想像します。これはあくまで私の意見であり、別の解釈があつたら、ぜひお聞かせ下さい。

秋の散策会

寛永寺、東照宮界限散策

原 宗康（高四十一回）



上野公園西郷像の前で

姿もなく非常に静かなエリアです。

日中は晩秋とは思えないほどの記録的な高温が続くこの頃、今年の秋の散策会は東京上野界隈を歩きました。

十一月十九日、二〇名の参加者一行は、鶯谷駅から寛永寺に向かいます。この辺りは国立博物館の裏手に位置し、駅から離れると寺院、墓地が並び、観光客の

程なく寛永寺に到着した

一行は、記念撮影の後、本殿を拝観しました。根本中堂と称するこの本殿は、幕末の上野戦争の際消失、その後明治十二年に川越喜多院の本地堂（三代將軍家光が建立）を移築されたものです。そうしたご縁があり、今回拝観するにあたっては、

松尾鉄城さん（高十八）に助力いただき、喜多院塩入住職に特段のお取り計らいのもと、寛永寺に十九ある子院の一つである、東漸院の住職・築土仁海様に境内を案内頂けることとなりました。

まず参加者全員で般若心経を読経し、ご焼香をした後、築土住職から寛永寺の

歴史を紹介頂きました。天海僧正による創建、創建時の年号である「寛永」の名

付けを朝廷より許可されたこと、東叡山と呼ばれた所以、徳川家の菩提寺となるいきさつ、もう一つの菩提寺である増上寺との関係など、非常に興味深いお話を伺うことができ、改めて川越とのつながりを強く感じました。また、普段見ることのできない薬師如来像や四天王像など歴史的価値の高い仏像を直接拝見することができました。

その後、普段立ち入ることのできないご靈廟に場所を移し、五代將軍綱吉公、八代將軍吉宗公、十三代將軍定家公、そしてその正室である篤姫が埋葬されるいきさつや、それら宝塔

等についてもご説明いただきました。この場所は都心とは思えないほどの静寂に包まれていました。ご靈廟の前には徳川家の御位牌所があつたそうですが、先の大戦で多くが消失し、一部の門が現存しているのみとなっています。空襲時には、

寺に残っていた女性たちや若い修業僧たちが協力して中ものを避難させたそうです。当時の住職は体を壊しており従軍できずに寺にいたそうですが、この時の様子を「花火のようにきれいに燃えた」と証言しています。おそらく建物の彩色に使われた顔料が花火の成分と同じようなものに起因しているのでは、と伝わっているそうです。

ご住職の熱のこもった詳細なご説明に、あつという間に時間が過ぎてしまいました。一行は寛永寺を後にして、公園内の上野東照宮を目指します。当日上野公

園は好天という事もあり、大変な賑わいでした。

上野東照宮に着いてみると、多くの外国人観光客が参拝していることに驚かされます。その多くが金色に輝く社殿を動画に収めている様子でした。我々一行は時間の都合上、外からの参拝のみとなつてしまい、国指定重要文化財である金色殿は見学する余裕がなくなつてしまいました。金色に輝く社殿は見学できませんでしたが、金色に輝く銀杏木と幕末の志士である西郷隆盛像の前で集合写真を撮ることができました。

最後に懇親会場に場所を移し、非常に内容の濃かつた今回の散策会を振り返りながら、参加者同士懇親を深めることができました。

今回の散策会では普段、通常では得られない貴重な機会を得ることができたのも、川越初雁会ならではの言えます。

雁の記

川越散策日記

新河岸川を探る

その二

荒牧澄多 (高二十七回)



今回の探訪の古地図

新河岸川川下り再開
八幡橋（やわたはし）を渡っている途中で、二度ほど寄り道をしてしまいました。再び新河岸川を下りま

しょう。

八幡橋の百メートルほど下流に、JR川越線の橋梁があります。野田町一丁目と上野田町、田町の三つの

町が接する交点です。橋梁名をJR東日本に問い合わせたのですが、残念ながら回答はいただけませんでした。

この橋に近づくには、八幡橋からワイヤーネットでくるまれた石堤の上を歩いていかなければなりません。皆さんには、あまりお勧めできません。また、取材したのは八月だったため、草の丈が・・・。

この橋は、鉄道橋では珍しいコンクリート製の橋です。長さが十一メートルほどという短い橋だからでしょうか。上流側には、手摺や電気の配管があります。橋台は、コンクリート造りで、中央にアーチを設けています。この程度の大きさならわざわざアーチを設けずに、全部コンクリートで埋めてしまった方が手間がかからず良さそうなものを、と誤ってしまいます。



観音下橋から JR を望む

なされています。

橋台のコンクリートは、橋の影になっている部分がいまままです。後年に作られたものでしょうか。詳しいことは分かりません。

この設計に携わった技術者の意地でしょうか。おそらく、私みたいなの好き以外、だれも見ることのないデザインです。

さらに、橋台と土手の間にも小さな橋をかけています。こちらもコンクリート製。本体ののっぺりとした外観と比べ、束状のリブが見られるなど、デザインが

て、主に軍事的観点から建設されました。一九八五年に電化され、埼京線との直通運転が開始され今に至ります。

さらに川を下りたいのですが川越線に阻まれています。また、川沿いの道もないので大きく迂回し、田んぼを通り抜け下流の土手に出るしかありません。そし



アーチがある JR の橋台

てようやく観音下橋にたどりつきます。

この道は、県道川越日高線の旧道です。古い地図には、吾野道とか秩父道とか書かれたものもあります。

この街道は、現在の仲町交差点を西に向かい。妙養寺入口の二村質屋さんを南に曲がります。そのすぐ南、昔六反といわれた道を西に向かい、妙昌寺の前の堺町を南下します。さらに、現

在の月吉陸橋のすぐ東、山崎米穀店のところの信号で日高県道を渡り南下。道は大きく西にカーブしながら坂道を下ります。そのカーブの所に、「三光町公民館兼集会所」が建っています。そこに祀られているのが富士見山馬頭観世音。観世音菩薩の変化身の一つです。そこからさらに、東上線の踏切を越え、新河岸川まで下っていきます。そこにあるのが観音下橋。

もうお分かりですね、橋の由来が。カーブにあった富士見山馬頭観世音の下にあるから観音下橋。昭和三〇年代半ばに行われた町名地番改正以前は、小字名に観音下がありました。

この橋については、寄り道をしなければ次回ご紹介しましょう。

第二十三回 ゴルフコンペ

梶田 進一（高二十回）

日時

令和五年十月六日（木）

場所

川越カントリークラブ

参加者三十二名

初夏に二類から五類に引き下げられ、コロナの心配も少し収まり、プレー後の表彰式を兼ねたパーティーも復活できた今回のコンペでした。

総勢三十二名の参加をいただき元気な皆さんの笑顔と歓談がパーティーにて



久しぶりのパーティー

見られました。また今回、新しい仲間も加わっていただきました。今後さらに活動を活発にするため、ゴルフ部としては四十名の参加を目標にしています。ぜひご協力をお願いします。成績は以下のとおりです。

優勝 粕谷孝志氏

（高十九回）

準優勝 岸野洋氏

（高二十五回）

三位 磯野憲一氏

（高十二回）

藤沢周平読書サロン

平成三十年に圓山さん（高十七回）の呼びかけ文、

『川越初雁会のよしみで

呼び掛けさせてもらいました「時代小説家・藤沢周平／読書サロン」に賛同して

いただき感謝しています。

この場が、心置きなく時を過ごせるサロン社交の場になっていくことを願っています。』

といった主旨で発足した



幸すし読書会にて

読書会も七年目になりました。昨年亡くなられた長島さんの好意で、幸すしさんの会場をお借りして始まりました。これからも、続けていきますので興味のある方は連絡ください。

事務局からのお願い

年会費二千円未納の方は、お早めに納入をお願いいたします。

発行人

会長 金子 憲二

事務局 川越市中台南

二丁目十三の十

題字 吉沢翠亭（義和）

印刷 (株) 櫻井印刷所